〔草木育種後編下品藥〕白朮本草　和名うけら、萬葉　漢種延享四卯年四月、唐山より種子四合を獻せし、官より翁に賜はり是栽させ、後官園に栽、今いふ種白朮これなり、春芽を生じ夏紅花あり、秋月根を掘り大なるを藥となし、小なるは種となし、又園に栽べし、早春根を分け畦へ栽るもよし、養を用ひず、年久しくして掘るもの上品なり、一種天目白朮といふものあり、上品なり、家翁○阿部喜任父武州川越の官園に獻せしものなり、これも藥用によし、

蒼朮本草　享保年中漢種來りて、今官園に栽ゆ、培養の法白朮とおなじ、

〔日本書紀二十九天武〕十四年十月庚辰、遣百濟僧法藏優婆塞益田金鍾於美濃、令煎白朮、因以賜絁綿布、十一月丙寅、法藏法師金鍾獻白朮煎、

〔出雲風土記意宇郡〕凡諸山野所在草木、○中略　白朮、

〔萬葉集十四東歌〕相聞

古非思家波、素氐毛布良武乎、牟射志野乃、宇家良我波奈乃、伊呂爾豆奈由米、
和我世故乎、安杼可母伊波武、牟射志野乃、宇家良我波奈乃、登伎奈伎母能乎、

右九首、○七首略　武藏國歌、

相聞○末勘國

安齊可我多、志保悲乃由多爾於毛敝良婆、宇家良我波奈乃、伊呂爾氐米也母、

〔散木弄謌集十長歌〕百首歌中述懷をよめる

さすがにみよの、はじめより、雲の上には、かよへども、なにはの事も、久かたの、月のかつらし、をられねば、うけらがはなの、咲ながら、ひらけぬことの、いぶせさに、よもの山べに、あくがれて、このもかのもに、たちまじり、うつぶしそめの、あさ衣、○下略

〔年山紀聞四〕うけらが花